ポスト・モダンの世界における聖職者

ハービー・コックス
岡本尚子 訳

第二次世界大戦が終わって間もないヨーロッパ。パリのローマ・カトリック教会大司教であったスハルド枢機卿は、戦いに疲れ果てたフランスの人々の宗教的要求に応える新しい計画を思い付いた。それは、彼自身の想像を超えて、現在台頭しつつあるポスト・モダン世界における聖職（priesthood）というものを考える上で、はるかに広い示唆を与えるものとなったといえる。枢機卿は、彼の目には教会と労働者階級の間に横たわる深い溝と思われるものに苛立っていた。彼はその断絶のひどさにしばしば苦悩し、それは瞑想や祈りの中に常に入り込んでくると、友人に語っている。そして遂に、若い工場労働者達と共に働いていたゴーディン、ダニエルという二人の司祭と共に、スハルド枢機卿は、後に「労働司祭運動」として知られるようになった計画を立案したのである。

それは急進的な試みであった。何百名ものフランスの若い神学生達が、司祭としての教育だけでなく、工場での労働技能の訓練も受け、通常の教区を離れて、パリ周辺の広大な工業スラム地域や、マルセイユ、その他フランスの中小都市に派遣された。それぞれの地で神学生達は、都市部のプロレタリアートの中に入って生活し、働

き、聖職の新しい形態を模索していったのである。この考え方は、後に司祭の一人が書いたように、「キリストが人々の中の人となったように、労働者の中に入って一労働者となる」ということであった。

労働司祭運動は、最初から大きな議論の的であった。若い司祭達は、工場やスラムの労働者達に直接、慈愛を込めて語りかけた。多くの予想に反して、彼らは労働者やその家族達に温かく迎えられ、そして共に新しい、より時代に即した聖職のあり方を考えるようになっていった。しかし、保守派の聖職者達は、この試みの行く末に大きな懸念を抱いた。若い司祭達が労働者階級の「害毒にまみれた空気に染まりすぎてしまう」という者や、祈りに十分な時間をかけずに「単なる世俗の」問題に必要以上に関わることになってしまうと危惧する者もいた。教皇自身もまた、この試みに対して重大な制限を表明し、一九五四年、リエナート枢機卿は増大する反対勢力の意見を正式に表明した。「現在行われている試みは本来の形で続けることはできない……。教皇は教義上の理由からこの決定を下された。聖職者であることと労働者であることは、二つの異なる別個の機能である。すなわち二つの異なった生活状態である。従ってこの二つは、聖職の理念から堕落することなしに一人の同一の人間の中に共在することはあり得ない。神と魂への礼拝に一生を捧げることが聖職者としての務めであり、労働者は世俗の務めを果たす存在である。」最終的にカトリック教会は、すべての労働司祭は工場での労働をやめ、それぞれの司教の緊密な監督の下、通常の教区に戻ることを教令として定めたのである。こうして労働司祭運動は公式には終焉したが、司祭の中には教会当局の認可なしにそのままとどまる者もいたという。

宗教的な聖職の本質とはいったい何なのか？　産業社会、情報社会の変化に、より即応した聖職を求めるのは不可能なのか？　聖職の組織やあり方を変えていこうとすればどのような抵抗に遭うのか？　このフランスでの労働司祭運動は、キリスト教という枠を越えて、ポスト・モダン世界における聖職のあり方について多くの疑問を投げかけている。

英語でいう「聖職者」"priest"の語源は、ラテン語の「プロスビテロス」"presbyterios"で、単に「長老」を意味する。つまり、ある宗教的集団の中で特定の務めを頼まれる、知恵と経験を備えた人を示唆している。これに加えて聖職に付随するようになった別の意味合いもいくつかある。主なものに媒介者（mediator）という考え方がある。これは、神の前の人間の代表として、また神の代弁者、神と人とのパイプ役として、神と人の間の仲立ちをする人を意味する。多くの宗教において、聖職はさらに追加的な意義を持っている。すなわち神にいけにえを捧げる人を示唆している。今でも、聖職の主な役目は神と人間との仲立ちとなっている。

宗教史や比較宗教学を研究してゆくと、聖職およびその担い手の存在は人類史の殆どすべての宗教的伝統に見られるひとつの特徴ではあるが、その形態は、時代や場所によって大きく異なっていることが分かる。同じひとつの宗教的伝統の中でも、時の変遷に従ってその形態は変化していく。例えば、古代ユダヤ教における聖職者の歴史に関する最近の調査によると、初期の段階では様々に異なる人々が様々に異なる方法で聖職者として仕えていたことが分かっている。しかし社会がより複雑になり、階層制ができ、中央集権化してくるにつれて、聖職もまたレビ族というひとつの部族、またその中でも特定の人間へと、より中央集権化していったのである。ヒンズー教、仏教、キリスト教における聖職者の役割をみても、時代と環境の変化の中で、聖職のあり方が驚くほどの変遷を示している。キリスト教の中でも、教会によって、また時代によって、聖職者の役割は著しく異なっている。例えば少なくともこの数世紀のローマ・カトリックの伝統においては、聖職者は、決して消えることのない、超自然的な特質が授与されると信じられている。特別な叙階という儀式によって、聖なる序列につらなる一員として明確に区別されている。また、ラテン式典礼を行うカトリック教会では、独身を貫くことが義務づけられているが、東方帰一教会派やマロン派ではそうではない。英国国教会の殆どは現在、男女ともに聖職を授けられており、結婚も認められている。東方正教会では、聖職者は修道士としての誓いを立てて修道会に入らない限り、一般に妻帯は認められており、多くの聖職者はそれぞれ他

の職業も持っている。

プロテスタント教会では、聖職のパターンは十六世紀の宗教改革によって形作られた。初めは法律を学び、後に改宗後、修道士となったマルチン・ルターが、キリスト教の最も初期、あるいはユダヤ教の初期にまで遡ぼる聖職の概念を、ようやく蘇らせたのである。彼は、教会のすべての人間は神によって聖職者――神の愛をまわりの人間に仲立ちする媒介者――と呼ばれる存在であると教えた。このルターの教えは、古代ユダヤ教にみられる「司祭の国」という概念と、エリザベス・シュスラー・フィオレンザが「弟子の平等性」と呼んでいる、キリスト教初期の徹底的な平等主義に端を発していた。ルターは、恒久的に隔離され神聖化された聖職者のヒエラルキーによくみられる権力の乱用と腐敗への誘惑を、特に懸念していた。毎日の生活の喜びや苦しみから聖職者をあまりにも隔絶させてしまうとして、彼は聖職者の独身制にも反対し、彼自身、修道女であった女性と結婚した。

ルターはまた、過度に崇められ、隔離された聖職制度が、いかに腐敗に走り、神聖なる力を独占しようとするかに心痛めていた。その当時、教皇は、ローマに聖ペテロ大聖堂を建造する資金調達のねらいもあって、「免罪符」を販売することを強要していた。この免罪の考え方は、聖書を根本にして考えれば、また当時広まっていたカトリックの教えから考えても、疑わしいものであった。しかし免罪符は、亡くなった祖先や家族が間違いなく天国に行けるようにと願う人々に売られていった。ルターは先ず、この免罪の考え方と、当時の教会の腐敗した財政慣行の両方を攻撃した。そして、有名な彼の小冊子『教会のバビロン捕囚』の中で彼は、聖職者のみが神と人の仲立ちをする媒介者ではないと主張した。彼は、自身の聖書の解釈に基づいて、すべての人間は神の存在に平等に近づくことができる。なぜならイエス・キリストの精霊はすべての人の中に存在するからであると主張したのである。我々はすべて互いに神の仲立ちができるという、有名な「万人司祭説」を彼が宣言したのは、この頃である。

ルターの後四〇〇年間、彼が提唱したこの考え方が、様々なプロテスタント教会で徹底して実践された訳では

必ずしもなかった。しかしこれはうなづけることである。いかなる宗教的な組織においても、ある種の職務者が、次第に象徴的な力と組織的な力を蓄え、そしてその権力を神学的に正当化する方法を見つけていく傾向があるからである。このことは、腐敗の危険性は、聖職という考え方自体にあるというよりも、むしろ、その宗教組織内部の力学に、そしてまわりの社会とどの様に関わり、影響し合っているかに関係していることを示している。聖職者の責任がより広く分担されるほど、腐敗や権力乱用の機会が少なくなると言えよう。

ではポスト・モダン世界における聖職者の新しいモデルとして、従来の伝統的な形よりもより適切なモデルはあるだろうか？　一九六二年から一九六五年にかけてローマで開かれた第二回ヴァティカン公会議の直後、メキシコのクエルナバカの司教ドン・セルジオ・メンデス・アルシオが、この問いに対し正に的を得た答えを残してくれている。彼は宗教文化史学者から転じて、司教となった。第二回ヴァティカン公会議では、「神の民」としての教会という考えが強調され、またすべての教会員の責任の強調、とりわけ信徒が教会組織内での責任を分担していくことが強調された。そんな中、メンデス・アルシオ司教は、担当区クエルナバカの大聖堂で、この新しい方向性を象徴するような礼拝式を始めた。日曜のミサで、彼は平服を身に着け、側面の入り口から満員の聖堂へと入り、二つの通路が交差する中央の所に立つ。集まった人々には、ゆったりとしたズボンに開襟衿のシャツ、皮のサンダル姿の彼が見える。まわりの参会者に向かって彼は微笑みかけ、軽く会釈する。まわりの者が司教の大外衣、冠、その他ミサの為の祭服を持って近づき、信徒達が見守る中、司教に渡す。それらを身に着け、色鮮やかな聖職装に身を包んだメンデス・アルシオ司教は、席に登り、同僚の司祭者と共にミサを行い、説教をする。ミサが終わり、司教は参列者全員が再び完全に見守る中、聖堂の中央部に戻り、参列者が彼の祭服を脱がせ、そして司教は再び平服姿に戻り、出口の所まで歩いて行き、そこで退場する参列者を見送るのである。

これをメンデス・アルシオ司教は陽気にも「教会ストリップ・ショー」と呼んだりしたが、実はこれには深刻

な神学的目的が含まれていた。すべての人間が複数の役割を担い、力の蓄積よりも共有がより大切なポスト・モダン世界に生きる信仰者にとって、重要な、聖職者に関する二つのことを極めてドラマチックかつ目に見える形で表現している。

一、　先ず、聖職者も他の人々と同じ人間であるという事である。他の人間と同じように生まれ、生き、働き、そして死んでいく。聖職者は何か特別な階層に属する者ではない。半ば神聖化された存在でも、普通の人間が感じる苦しみや辛さと無縁の存在でもない。

二、　二つめは、アルシオ司教の行動が明らかにしたように、聖職者はその宗教集団の中の、ある特定の責任を実行する存在にすぎないという事。信徒も含む信仰者集団のすべての構成員が所有し実践するすべての「天から与えられた使命（gift）」の中のひとつを、聖職者は表現しているにすぎない。宗教組織の中には果たすべき様々な役割や務めがあり、聖職者はその中で、あるひとつの役割を担っている、という事である。

クエルナバカのメンデス・アルシオ司教は二十年間にわたり、カトリック教会内の典礼改革運動の指導者であり、また、現代世界の諸問題に対してより創造的に教会が関わっていく方法を、先頭に立って模索した。彼は、公正で平和な世界を目指していく為に、クリスチャンが果たすべき政治的社会的役割を強く主張した。特に、当時ラテン・アメリカで多くの苦しみの根源となっていた軍事独裁政権によって抑圧されていた人々の人権の、強力な擁護者であった。彼の典礼の実践と、社会的神学理論は互いに統合しあうひとつのものであり、彼はその両面を偉大な尊厳と知性をもって示したのである。

十年前に司教が退職する頃には、彼が立ち上がり公然と主張した事の多くに対する動きが、すでに世界各地のローマ・カトリック教会で起こっていた。第二回ヴァティカン公会議で導入された、極めて平等主義的で、多くの個人の参加を勧める運動は、ローマの新指導者層、教皇ヨハネ・パウロⅡ世と教皇庁聖省長官であるヨセフ・ラトジンガー枢機卿の両名によって異議が唱えられた。より政治的社会的に適応したキリスト教を求めた主張もまた、ローマから疑念と不信をもって受け止められた。

メンデス・アルシオの引退後、保守的で伝統的な司教がクエルナバカの司教区に赴任し、彼が行った変革の多くは今や元に戻されてしまっている。

スハルド枢機卿、マルチン・ルター、メンデス・アルシオ司教について考えていく時、聖職者における変化は少なくとも二つの要素に呼応して起こることが分かる。まずひとつは、その宗教的伝統それ自体の中のいかなる変化、進展の状況にも呼応する。時の流れと共に、どの宗教的伝統もすべて進化し、発展していくものである。でなければ硬直化し、死に絶えてしまう。同様に、変化、進化、発展をみない永久不変の聖職の形態などないのである。第二に、その宗教が存在する環境としての社会、文化状況の変化にも呼応する。人種的平等、民主主義、男女平等、国際協力等を力説する運動の台頭と広がりは、宗教団体がそれらに対してまったく無反応でいることのできない空気を作り出している事は明らかである。

ルターは、新約聖書の解釈のみに基づいて聖職についての考え方を再構築したのではなく、ますます貪欲になっていく教会から財産を絞り取られる北欧の農民達の怒りと憤りにも呼応したのである。また、彼の宗教改革は、宗教上の力を政治的な帝国主義へと変容させようとするローマ教会の権威者達に憤る、各国の君主によっても支持されていた。戦後のフランスに生きたスハルド枢機卿は、工業社会の階級間に横たわる深い対立の解決に取り組まねばならないと気づいた。労働司祭運動という彼の大胆な試みが、最終的にカトリック教会の権威上層部によって終わらされたからといって、その構想本来の創造性と斬新さが損なわれるものではない。フランスで労働司祭運動が終局を迎えた後に、それと非常に似通ったものがドイツのプロテスタント牧師達、ラテン・アメリカのカトリック司祭達の間で起こっている。過去四十年間のキリスト教に見られた最も強力な潮流のひとつである「解放神学」の運動の発端は、一部にはこの労働司祭運動に負うところがあると論じることができる。メンデス・アルシオ司教も、聖書と宗教史の学者であったが、第三世界の秩序の崩壊と苦難、抑圧を知り、教会と聖職者が、神の王国というキリスト教の概念の中核をなす、正義と平和の証明者になる事を願ったのである。

神の存在をいかにして人に伝え、また、人間がいかにしてその聖なる意志に出合うかという問題は、宗教が存在する限り、人々を悩ませ、考えさせ続けるであろう。宗教が提起する問題は人間の存在にとって余りにも根本的なものであるから、人は人である限り、何らかの形で宗教的であり続けると考えるのが賢明である。人類にとっての宗教をこのようにより大きな構図の中で俯瞰する時、聖職者の役割は様々に異なる表現や形態を取ることは免れないであろう。しかし、象徴的な力は、現実の力となる事を認識せねばならない。そしてそれはプラスにもマイナスにも行使されうるのである。聖職者もまた人間であるが故に、象徴的な力や霊的な力を管理し独占しようとする傾向を持つものであるから、既成の聖職階級に対する反抗が存在すると考えるべきであり、また、宗教的伝統に活力がある限り、聖職とは何であるか、問い続けていくものであると考えるべきであろう。一方、ある意味ですべての人間が互いに神の媒介役となり、すべての人間が他者から神の恵みを受けるというマルチン・ルターの歴史的主張は、今後も強力な洞察であり続けよう。イスラム同胞団や、日本のいわゆる新宗教、また、異なる宗教の人々の和解を求めるヒンズーの信徒団体等、彼の主張に相似するものを、他の様々な宗教的伝統の中に容易に見出すことができる。変化と流動性が強調されるポスト・モダン世界において、どのような聖職の形態も、唯一の正当性を主張する資格はない事は明確と思われる。何らかの意味で我々はすべて互いに聖職者であり、その誰でもが担う聖職というものの最も有効なあり方を、今後も常に探り続けていかねばならないであろう。

（ハービー・コックス・ハーバード大学教授）
（訳・おかもと　なおこ）